



お役所仕事 搬送足かせ

民間主導 患者600人県外へ

東日本震災の発生直後、必死の努力で透析患者を受け入れ続けた福島県いわき市の医療法人きつひわ。慢性の水不足、治療を断念した他の病院からの患者増、福島第一原発事故による社会機能のまひが重なり、会長の菅野隆史医師（68）は約600名の患者の県外搬送を決意する。しかし、行政の手続きも遅く、一回の対応思わぬ足かせとなった。（林勝）

福島いわき市の入又で被災した透析患者の受け入れのために奔走する福島総合病院の菅野隆史医師（68）。
（福島総合病院提供）



■搬送要請できぬ
「透析歴一十八年の鈴木君は、透析患者を受け入れ続けた福島県いわき市の医療法人きつひわ。慢性の水不足、治療を断念した他の病院からの患者増、福島第一原発事故による社会機能のまひが重なり、会長の菅野隆史医師（68）は約600名の患者の県外搬送を決意する。しかし、行政の手続きも遅く、一回の対応思わぬ足かせとなった。（林勝）」

「搬送要請できぬ」という言葉が、患者や家族の心に残る。行政の手続きも遅く、一回の対応思わぬ足かせとなった。菅野医師は、搬送要請を出したが、行政からは「搬送先が見つからない」という理由で却下された。また、患者の搬送には、適切な医療機関が見つからないという問題も生じた。菅野医師は、患者の命を守るため、民間主導で患者の搬送を進める必要があると考えている。

行政混乱 現場見えず
「搬送要請できぬ」という言葉が、患者や家族の心に残る。行政の手続きも遅く、一回の対応思わぬ足かせとなった。菅野医師は、搬送要請を出したが、行政からは「搬送先が見つからない」という理由で却下された。また、患者の搬送には、適切な医療機関が見つからないという問題も生じた。菅野医師は、患者の命を守るため、民間主導で患者の搬送を進める必要があると考えている。

■仕組み作りが先
菅野医師は、搬送要請を出したが、行政からは「搬送先が見つからない」という理由で却下された。また、患者の搬送には、適切な医療機関が見つからないという問題も生じた。菅野医師は、患者の命を守るため、民間主導で患者の搬送を進める必要があると考えている。



緊急時でも手続き優先
「搬送要請できぬ」という言葉が、患者や家族の心に残る。行政の手続きも遅く、一回の対応思わぬ足かせとなった。菅野医師は、搬送要請を出したが、行政からは「搬送先が見つからない」という理由で却下された。また、患者の搬送には、適切な医療機関が見つからないという問題も生じた。菅野医師は、患者の命を守るため、民間主導で患者の搬送を進める必要があると考えている。

■対応したい
菅野医師は、搬送要請を出したが、行政からは「搬送先が見つからない」という理由で却下された。また、患者の搬送には、適切な医療機関が見つからないという問題も生じた。菅野医師は、患者の命を守るため、民間主導で患者の搬送を進める必要があると考えている。

次回は27日。石巻赤十字病院の石井正医師インタビューをお伝えします。

医療と行政——識者に聞く

お役所仕事が災害現場の足かせになる要因とは。被災地の医療支援をしながら、行政の欠点を指摘している医療法人鉄蕉会・亀田総合病院の小松秀樹副院長に写真に聞いた。

緊急事態に「全体のシステムができてから」という役所の発想が理解できない。

官僚は現場の状況が分からないまま、役に立たないどころか現場の足を引っ張るルールを作ってしまう。例えば、災害救助法が適用された市町村から県外に避難した

千葉・亀田総合病院

小松秀樹副院長



被災者の宿泊費などは国から支給されるが、今回、観光庁が運用ルールとして都道府県に通知した内容は最悪だった。その手順は①旅館・ホテルの全

④観光庁は名簿を業界団体に提供
⑤業界団体がリストと名簿を基に振り分ける—というもの。
これでは、切羽詰まった被災者に間に合っわけがない。面倒な事

官より民間の力を

国業界団体が、受け入れ可能な宿泊施設のリストを作って観光庁に提出②それを被災県を通し、被災市町村に送る③被災県は県外避難者の名簿を集約し、観光庁に提出

業務を混乱状態にある被災自治体に押しつけ、最終的な差配も観光業界に丸投げしている。そもそも観光業者が、病気や要介護状態など個別の問題を抱えた被災者

の割り振りをするのは不可能だ。そういう人々には避難した後も個別の支援を提供しないといけないのだから。

—どうすれば良かったのか。被災者を受け入れる自治体の支援者が宿泊先を決め、行政が追認していくしかないと思う。特に患者や障害者の場合、被災地で活動する医師や看護師、社会福祉士らが本人や家族の意思を踏まええうで避難するか判断。避難先の医療機関やコーディネーターと相談して受け入れ先を決める。

—国民の多くは国や行政に頼るところが大きい。

—国民の多くは国や行政に頼るところが大きい。第三代米大統領トーマス・ジエファソンは「自由な政府は、信頼ではなく、猜疑にもとづいて建設せられる」と教えている。国民は、時によって行政が頼りにならないこと、足かせになることを認識すべきだ。

—国民の多くは国や行政に頼るところが大きい。第三代米大統領トーマス・ジエファソンは「自由な政府は、信頼ではなく、猜疑にもとづいて建設せられる」と教えている。国民は、時によって行政が頼りにならないこと、足かせになることを認識すべきだ。

15歳の春 目標へ一歩

一家に一定早い春の知らせが訪れた。沙也加さんが、震災前から志望していた福島県浜通りの進学校に合格したのだ。

郡山市で臨んだ作文と面接では、幸さんが「本番に強い子」という実力をその通りに発揮した。

作文の課題は「将来の目標と、そのため

に高校生活をどう過ごすか」。

沙也加さんは制限時間の半分、わずか30分で300字の原稿用紙2枚をびっしり埋め、残り時間で細かい表現を見直す余裕もあった。

落ち着いていられたのは、心の中が変わらぬ思いがあったからだ。「獣医師になるという目標に向かって、高校では苦手な教科もバランスよく勉強したい」。素直な気持ちや文字に込めると、その後の面接にも

原発1キロからの避難
いつの日か

—33—

臆せず臨めた。

進路選びの大切な1年に、原発事故のおおりで4カ所も住む場所を転々とさせられた沙也加さん。

壁の薄い仮設住宅で簡素な勉強机に向き合う日々では、「集中できない」と投げやりになることもあったが、動物好きな自分の目標だけは捨てなかった。

卒業まで1カ月足らず。「高校はバス通学かな。面倒くさいなあ」。少しぼやきな

がらも、いつもの調子で新生活に思いをはせる表情には、持ち前の柔和さが戻っていた。

福(はなわ)さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生。